

## 第15回 観光統計の整備に関する検討会 議事要旨

日時 : 平成30年12月11日(火) 10:00~12:00

場所 : 中央合同庁舎2号館15階 X・Y共用会議室

参加者 : 委員 : 山内座長、菅委員、土屋委員、兵藤委員、宮川委員、山本委員  
事務局(観光庁観光戦略課)、業務委託事業者

議事概要 :

### (1) 訪日外国人消費動向調査の見直しについて

- ・ 事務局より、平成31年からの訪日外国人消費動向調査の見直しについて資料に沿って説明。
- 入国管理局からの提供データは検証用という話だが、推計のために積極的に使うという利用方法は、許されているのか。
  - 現時点では、まだ検証用ということでご提供いただいている状況。
  - ぜひその方向で使えるように願います。
- クルーズ船というのは、寄港地を突然変えてしまうということが、よくあるのか。
  - かなり寄港地が変わることがあるようで、実際にもう既に出航湾への手続の時点で、同日に複数港に手続を出している船がある。
  - 補足をさせていただくと、もともと中国のクルーズで来られるお客さんは、特定の目的地に行きたいというよりは、船旅そのものを楽しまれている、そちらでクルーズを選ばれているお客さんが多い。

### (2) 地域観光統計の作成手法の見直しについて

- ・ 事務局より過去の既存統計の見直し等の経緯について説明。
- ・ 設計業務委託事業者より「地域観光統計に関する作成手法の見直し」について説明。
- ・ 事務局より「地域観光統計に関する論点等について」を説明。
- 日本人の按分をする際に、旅行前支出などは居住地だろうが、按分するのに、例えばパッケージ費用とか旅行費用とか、交通費とかを按分するのに、居住地を考慮する必要がそもそもあるのか。
  - 9割を、目的地に配分して、残り1割を別にどこにも加算しない方向もありかと思っている。交通費も全部が按分してしまっているのか。受け地で受け取るお金

が大きくなり過ぎても、それもどうかという疑問もある。

- 支出は受け地でしかないのではないかと。受け地に行くためだけにあるのではないかとこの気はする。
  - 地域の経済波及みたいな話を見たいとするならば、全部入れてしまったら過大に出る。だから、地域の正確な経済効果を測るという意味で言ったら、私は按分してもいい気がする。ただ、地域間交通を按分すべきかどうかは、問題である。ただ、パッケージツアーについては、現地で実際の消費が発生するので、それをしっかりと発生した地域に按分することは必要だと思う。
  - 例えば、各地域別に価格指数のようなものをつくり、それに応じて配分比率を変えたりともできるかもしれないし、それにより多少精度が上がるのではないかと。このと、国内の観光客も精度が低いという話があるが、それを4倍のサンプルサイズを増やそうと。これは、できることならやっていただければいいが、あまり効率がいいと言うか、そこまでするのかということもある気がする。そういう場合に、宿泊旅行統計調査の情報というのは、今回の場合では結構使われているのか。
  - 宿泊旅行統計は、検証はしようということでは作業を進めているが、今回のモデルの中には入っていない。
  - 宿泊旅行統計調査みたいな供給側、現地の調査で確実に把握できるものというのは、比較的精度が高いということが言えると思う。それをここにうまく取り込むことで、多少精度が上がるだろうし、例えば、宿泊旅行統計調査、いつも思うのは、泊数だけを聞いているわけですが、仮に単価みたいなものが聞けたりすれば、平均単価のようなものだけでもかなり情報としては使えるものができるのではないかと。この話を聞いて感じた。
- 居住地のものとは、結局手数料を払ったという概念で捉えればいいのかということか。
    - パッケージなら然り。各県の観光政策をつくる方々で、発地の活性化とかは、それは検討していないと思う。それは、9割の分を、各県に配分すればいいのかと思う。
  - 精度の話が出てきたが、1つの考え方は、95%信頼区間を出す。都道府県別しかも四半期で、サンプル調査でというのは、はっきり言って難しい。それで、どうしても都道府県レベルでもっといい精度が欲しいというのが、全部の都道府県から、声が上

がったら、それは4倍にしてもいいのではないのか。私は、そこまで要求するのならば、それは当然国として予算をつけるべき話だ、と思う。

- 信頼区間をつけたうえで出すというのは、例えば、国内分についても、それをつければ、四半期で都道府県というのもありなのではないかという話か。
- もちろん。信頼区間というのは、ここからここまでは誤差だと思ってくださいと、だから、この範囲は、増えても減っても、誤差の可能性が高いと、そういう見方をしなければいけない。

○ 訪問者1人1泊当たりと宿泊訪問者1人1泊当たりの旅行消費単価がでていますが、訪問者1人1泊当たりは日帰りも含んでいるということか。

- 日帰りも含んでいる泊数。日帰りは0泊で、集計値である1人当たりの消費単価を、集計値である平均泊数で割った値になるので、平均泊数に0泊も含まれている、0泊の人も含まれている平均泊数で割っているという値になる。
- 宿泊訪問者1人1泊当たりには宿泊費も入っているわけか。それなのに平均泊数が結構下がって、千葉とか大幅に下がっているのがあったりして、上は宿泊していない人を含んで、下は宿泊している人だけで、宿泊費を両方含んでいるのに減るとするのは、違和感ある。
- 平均泊数で割っているために、上の日帰りも含んだ平均泊数は、小さい。分母のほう小さくなるので、大きい値が出たりする。例えば、千葉県の場合で考えると、千葉県は日帰りが多いので、平均泊数がかなり小さい。それに対して、日帰りを除いたこの下のグラフだと、平均泊数、日帰りを除くと、かなり上がる。1泊当たりの単価は、平均泊数で割っており、下のグラフでは平均泊数が長くなるので、1泊当たりの単価としては小さくなる。

○ 日本人だと、個票にしても、使用に耐えられるだけの精度ではないだろうなとは思っている。有効なサンプルサイズは、都道府県ごとに数十というレベルなので、4倍は確かにコスト的には難しいかもしれないが、ある程度のサンプルが数票増えるだけでも効果はあるという観点からすれば、4倍は難しくても、少しでもサンプルを大きくする方向の検討も必要ではないか。そのうえで、宿泊統計など外部情報をうまく活用する方向が精度の向上には有効なので、使える外部情報があるのであれば、それを積極的に抽出の段階あるいは推計の段階で取り入れて、精度の向上を図るといって、その両面が必要だろう。

- ▶ 年間のデータであれば、このサンプルサイズ4倍とは、わりと近い概念の精度となるのかとは考えているが、外部の統計も活用しながら、より精度を高めて、せめて年間で、日本人の、都道府県別の数字というのを出したいと考えている。
- ▶ 統計をつくるときに2つ大事なことがあると思っていて、1つはサンプルサイズだが、もう1つは、母集団をいかに復元するかということで、統計をつくる上で大事なことだと思っている。ビッグデータを使うときには、そこがどうしてもウィークポイントになっていて、ほかの各国、観光統計をつくっている方々も、ビッグデータの活用を検討されているが、カード会社の決済情報でいくと、やっとこのカード会社何社さんと連携を取れるから、それでようやく5割カバーできたとか、努力をしているが、統計をつくるどころまでいっている国はどこもないという現状である。なので、なかなかビッグデータを使うのも、いろいろ課題もあるということ、どれを使うにも課題がある観光統計である。それこそ、宿泊旅行統計とかも、需要側と供給側が両方の数字をうまく組み合わせて、より真実にできるだけ近い数字をつくれたらいいというのが、ずっと理想像ではあるのだが。できるだけいろいろな素材を使いながら、より真実に近い、使っていただきやすいデータをつくっていかれたらと思っているので、引き続きいろいろ教えていただきたい。
- ▶ おそらく入込客統計は、どこにいるかの位置情報だけということと、携帯電話の網羅率が高いこと、あとは、ある企業はかなり母集団復元についての技術を要しているということなので、かなり参考にはなりそうである。位置情報という限られた情報を、かなり網羅的に持っている携帯電話で把握することは、かなりできるのではないかと。ただ、消費は難しい。そちらはあきらめてしまうかというところもあるのではないかと。

### (3) その他

- ・事務局より次回の検討会の予定を説明。